

〈『神学大全』 翻訳完成記念特集〉

トマス・アクィナス『神学大全』の翻訳完成を祝して

---

八 卷 和 彦

昨年の秋にトマス・アクィナスの『神学大全』の翻訳出版が完成したことは、我が国の哲学研究にとってまことに意義深い画期的な偉業である。折から中世哲学学会の会長の任にある者として、会誌『中世思想研究』に特集を組むことになった主旨を、以下に記すこととする。

この翻訳第一冊の冒頭には高田三郎先生の記述による「『神学大全』邦訳序文」が置かれており、そこには「ここに、トマス・アクィナス Thomas Aquinas の主著『神学大全』SUMMA THEOLOGIAE の邦訳第一冊を世に送る。我々の企図するところは、本冊を手はじめとして、この大著の、通読・参看に容易であると同時に、厳密な学術的要求に応えるに足る、全訳を完成するにある」と、この事業に乗り出す趣旨が誇り高く宣言されている。そしてこの度、この宣言がついに成就されたのである。

この序文によると、その最後に記されている日付である昭和 35 年より十数年前から企画が着手されていたとのことなので、今回の完成までには、実に 70 年近くの歳月が費やされたということになる。日本の学術書の刊行の歴史において、これほどに長い年月にわたって継続され、そして完成にこぎつけたものは、おそらく他に例を見ないであろう。本中世哲学学会の会報第三号（1954 年発行と推測される）の 20 頁には、「会員諸氏による翻訳中の書物」の一つとして「Summa theol. I（聖トマス学院）」と記されているので、上掲の序文中に高田先生が記されているとおり、聖トマス学院が初期の翻訳作業の場であったことが分かる。

この翻訳事業は中世哲学学会そのものの事業として実施されたものでは

ないが、これを中心的に担ってこられた高田三郎先生、山田晶先生、そして稲垣良典先生がいずれも中世哲学会の重鎮であられる上に、翻訳作業を担われた他の方々の多くも中世哲学会の現ならびに旧の会員であるという事情、そして何よりもこの『神学大全』という著作そのものが中世哲学研究において有する意義に鑑みて、本『中世思想研究』誌上に特集を編むこととした。そして、この翻訳出版に参加された御存命の本学会会員のすべてに寄稿をお願いして、お応え下さった方々の文章が以下の諸稿である。

記すまでもないことであるが、トマス・アクィナスの『神学大全』を踏まえることなくして、少なくとも 13 世紀以降のヨーロッパ中世哲学の理解はありえないし、さらに中世哲学の理解なくして、そもそも西洋哲学の真の理解はありえないであろう。

ところで西洋由来の哲学という学問探究の上に築かれた科学・技術の本質を理解することのないままに、表面的な近代化を急いできたこの国であるが、1990 年代の「大学設置基準の大綱化」という政策が実施されて以降、大学という基礎研究の場から哲学という学問の基礎が駆逐されつつある。目先の利益を効率よく確保できる手段を提供することが大学の存在意義であると言わんばかりの社会風潮に押されて、上記の政策が実施されたのであるが、それから 20 年近くたつ今も、国立大学の法人化を経て、この傾向は増強されこそすれ、いっこうに改められる気配はない。

そして、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災を経験した今、この国の人々も政治もほとんどなす術がなくたたずんでいるかのようである。世界中に放射能をまきちらし、人間のみならず生きとし生けるものに被害を及ぼして、「ヒロシマからフクシマへ」という恥ずべき道筋を自らが招来してしまったという事実を目をふさぎながら、ただ国内における原発再稼働と国外への原発輸出を図ろうとしている政治の姿は、自らの足を冷静に省みて大胆に方針転換を図る勇気をもつことができないままに、むなしく原状への復帰を念じているだけの社会の指導層における哲学的思考の欠如が如実に示されているというたたずまいである。これは「第二の敗戦」と表現してもいいような状況ではないだろうか。

そもそも中世哲学会の設立が計画されたのは、上掲の「中世哲学会会

報」第一号によると1950年のことであり、実際に設立にこぎつけたのは1952年とのことである。その設立の際には、「近年我国に於きましても西洋中世思想に関する研究が漸く盛んになりつつありますことは御同慶の至りで御ざいます。各面から研究者相互間にまだ十分な連絡機関なきため個々に研究を進める上からも又内外の学会と連絡をとる上にも甚しく不便を与えるというのが実情でございます」と案内状に記されていたという。当時、「西洋中世思想に関する研究が漸く盛んになりつつあったことは、先輩諸氏から伺った話をも考え合わせると、1945年の敗戦という事実と無関係ではなかったに違いない。

このように中世哲学会の設立の経緯と現状を考量してみると、今回の『神学大全』の翻訳完成という偉業は、我が国における中世哲学研究の画期的な到達点を示すものであると共に、新たな出発点の礎ともなりうることであろう。

実際に、私自身、これまでの勉学の日々において、どれほどこの『神学大全』の翻訳にお世話になったかわからない。これから中世哲学を学ぼうとする人々にとってはもとより、哲学をさらに深くしっかりと研究しようとする人々にとっても、さらには科学・技術を本質から問い直そうとする人々にとっても、この翻訳完成は大いなる手助けになるに違いない。

今回、頂いた御寄稿を拝読すれば、この翻訳という困難な作業が多くの中世哲学の研究者を磨き育てたことも分かる。また、全巻の半数近くをお一人で翻訳されることになった稲垣先生の文章を拝読すれば、哲学の研究者たるものはいかなる心構えでどのように日々をすごさねばならないかも、自ずと知らされるであろう。少なくとも私は、我が身のいたらなさを恥じるばかりであった。われわれの中世哲学会が高田三郎、山田晶、稲垣良典という大先達をもちえた幸せとありがたさを、今更のよように実感している。

改めて、本翻訳を担当された、上記以外の日下昭夫、渋谷克美、横山哲夫氏らの物故会員、ならびに大鹿一正、大森正樹、片山寛、松根伸治氏らの現会員、および、校正ならびに索引作成等の諸作業を担われた諸会員（各巻の「あとがき」には、校正ならびに索引作成等の作業を担われた多くの中世哲学会会員のお名前が記されている）に対して、心より

お祝いを申し上げると共に、皆様の長年にわたるご尽力に衷心からの敬服の念を表す次第である。

さらに忘れてならないことは、創文社という出版社が、この息のながい出版事業を継続してくれたという事実である。本年 3 月 20 日に東京新宿の雄松堂書店本社において森永エンゼル財団の主催で「Theater For Ideas 現代への挑戦の書『神学大全』—みんなのためのトマス・アクィナス」という催事が開かれ、稲垣先生も講演をされたのだが、その際に紹介された故久保井理津男・創文社創業社長の稲垣先生宛ての書簡には、久保井氏がこの翻訳出版事業にかけた出版人としての勇気と熱意と誠意の大きさが溢れていた。創文社に対しても大いなる感謝と敬服の念を学会としてお伝えしたい。最後に、この翻訳全 45 巻の一揃いが創文社より上記の催事において、在東京ヴァチカン大使館の一等書記官を通じて法王庁記念図書館に寄贈されたことも会員諸氏にお伝えしておきたい。